

精度に優れた部品づくりサポート

鍛造技術

素材から一貫した高い品質と安定性でジャパンメードを印象づけてきたわが国の鍛造技術とその成果である鍛工品。かつて幾度となく日本の製造業の空洞化問題が大きく取りざたされたが、結果的には鍛造業の多くが国内にとどまり、その後の需要増に応えた。今、出口の見えない円高が続き、日本企業の海外生産化シフトが続くとともに、新興国の市場が成長しつつある。これらを受け、鍛工品製造拠点の海外移転の本格化と、その一方で、国内で行われる大型部品製造設備への投資など、これまでとは趣の異なる変化が起り始めているようだ。

機械メーカー 新興国へ進出加速

鍛造技術の基礎ともいえるべき鍛圧機械。これらを製造する鍛圧機械各社はこのところ新興国への展開を強めている。アマダは2011年12月に、上海市に中国事業の統括会社を設立したのに続き、上海に板金機械の新工場を建設中だ。現地生

産比率を大幅に高める。また、アイダエンジンリングは11年6月、ベトナム・ハノイ市に現地法人を開業。マレーシア工場も増強している。鍛造品をつくる側も体制強化の動きが活発で、今年から来年にかけて海外進出の事例が増える。

「日星金属制品上海」で生産した自動車部品を現地の日系部品メーカーと

日本・北米向けに販売している。手狭な工場に代えて旺盛な需要に対応する。

名古屋特殊鋼は和田山精機と共同で、8月にも

インドネシアでの金型製造に乗り出すことを計画している(同2月20日)。

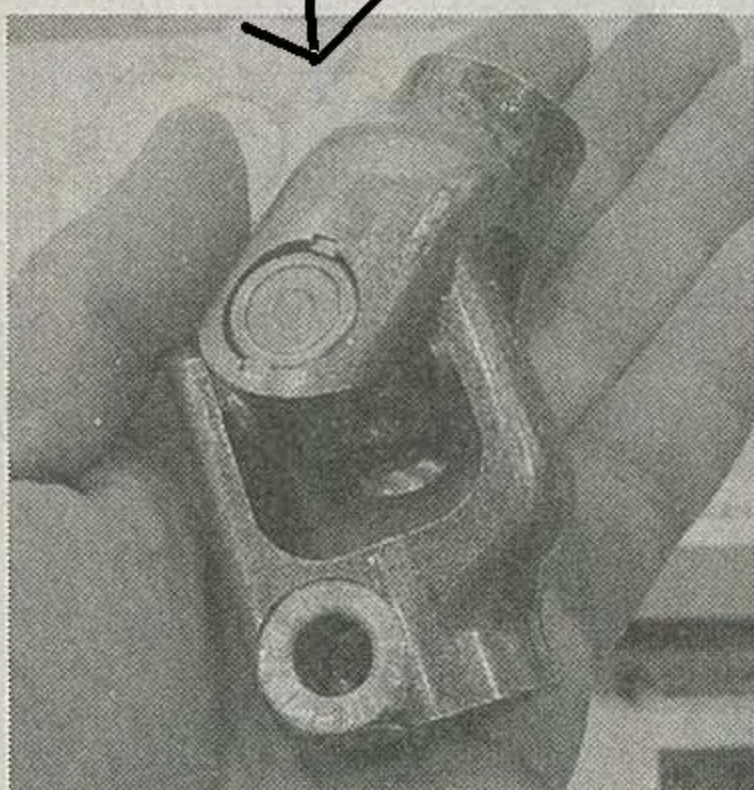
3月をめどに現地法人を設置し、西ジャワ

州の自動車部品向けテクノパークの工場で熱間・冷間鍛造用やアルミダイカスト、プレス金型などを製造する。インドネシアは自動車関連メーカーの進出が続く一方、現地の金型メーカーは少ない。また、同地で生産した製品を日本や米国に輸出することも検討しているという。

重要保安部品が多く比較的製造拠点の海外流出が少ないといわれてきた鍛造品にも、中級品を高いコスト競争力を生かす、日本国内の自動車部品メーカーに売りが込む。また、アジア圏に展開する日系メーカー工場への供給も視野に入れ

2011年 第42回 東京モーターショー 協和工業ブース

冷間鍛造にて製造したステアリングジョイント



車の部品で鍛造技術は活躍(昨年の「東京モーターショー」会場で)

る。